

八天遺跡第7次調査の概要

○第7次調査でわかったこと

今回調査を行ったのは、縄文時代後期中ごろ（約3800～3500年前）の大形建物跡の隣接地です。しかし今のところ同時期の遺構や遺物は確認されていません。その代わりに「複式炉」が見つかったことから、縄文時代中期終わりのころ（約4500年前）に集落があったことがわかりました。後期初めごろ（約4400～4100年前）の貯蔵穴も見ついているため、その時期にも人々がこの地で生活していたと考えられます。

大形建物が出現するよりもかなり以前から、この台地の上で縄文人が村を営み生活していたことがわかりました。

ちょっと豆知識 『複式炉』と『貯蔵穴』って？



館IV遺跡（立花）の竪穴住居跡と複式炉

縄文時代中期末の竪穴住居には、埋設土器（まいせつどき：床に埋めた土器）＋石囲炉（いしがこいろ：石で囲った炉）＋前庭部（ぜんていぶ：土間のような凹み）という構成を持った囲炉裏があります。これを『複式炉（ふくしきろ）』と呼んでいます。複式炉に使われている石の内側をよく観察すると、火に当たっていた部分が赤く焼けていることがあります。

八天遺跡で見ついている複式炉も壊されずに残っていたとしたら、左の写真のような姿をしていたのではないかと考えられます。



貯蔵穴の使用方法（模型）

縄文時代の人々は、穴を掘って採集したクリなどの木の実は蓄えていました。その穴の多くは、入り口が狭く底が広い、理科の実験で使うフラスコのような形をしています。

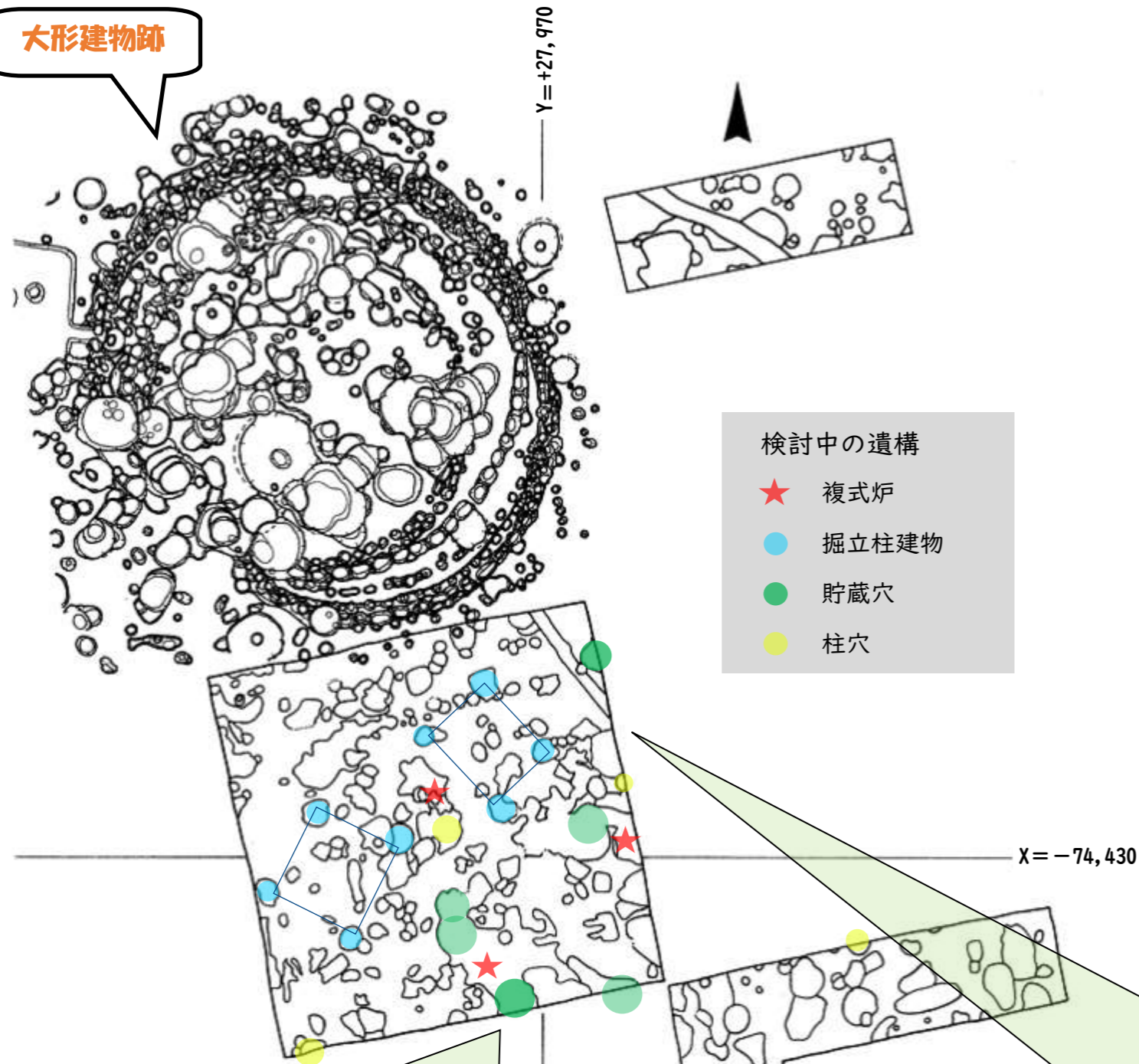
八天遺跡の今回の調査では、貯蔵穴から土器や炭、焼土、微細な骨片などがみついています。貯蔵穴が役割を終えたのちに、ゴミを捨てる穴や墓穴として再利用された可能性があります。過去の調査では、炭化したクリもみついています。貯蔵されたクリではないかという考えもありますが、大量の焼土や灰で覆われていたことから、儀礼などで意図的に焼かれたものと考えられます。



令和2年11月14日（土）

北上市教育委員会教育部文化財課

大形建物跡



検討中の遺構

- ★ 複式炉
- 掘立柱建物
- 貯蔵穴
- 柱穴

見どころ①!

縄文時代の竪穴住居の複式炉（約4500年前）
木の実などの食べ物を貯蔵した穴（約4300年前）



フラスコのような形をしているこの穴の中からは、炭化物や縄文土器が出土しています。大人でもすっぽり入ってしまうほどの深さです。

見どころ②!

見どころ④!

縄文時代の竪穴住居の複式炉（約4500年前）
木の実などの食べ物を貯蔵した穴（約4100年前）
中世の館の外堀（約450年前）



竪穴住居に作られていた囲炉裏を見ることができます。縄文時代中期末には、床に土器を埋め、その周りに石を据えた複式炉を使っていました。本来はきれいに石が組んであったはずですが、石が抜き取られてしまっていたり、貯蔵穴に壊されてしまっているため、一部分しか残っていません。

見どころ③!

縄文時代の竪穴住居の複式炉（約4500年前）
縄文土器が出土している貯蔵穴（約4400年前）
建物の柱穴（約3500～4500年前）



この貯蔵穴からは、縄文土器が出土しています。縄文土器をよく見ると、アルファベットの「J」のような形をした文様がつけられています。これは縄文時代中期末～後期初頭にかけての土器に見られる文様です。この土器は、貯蔵穴が使われなくなった後に、捨てられた状態であると考えられます。縄文時代の人々の行動を推測することができる、貴重な事例です。